

初代編集委員 佐々木正五先生を偲んで

平成 26 年 11 月 20 日、初代編集委員の佐々木正五先生が逝去されました。

本誌発刊を發案し、本誌にとっては産みの親でもある佐々木先生は、卓越した見識と豊富なご経験をもって、現状と将来を見据えた企画で、沢山の有用な記事を本誌に残してくださいました。どの記事においても、人々の健康と、これを支えるお仕事に日夜励んでおられる読者の皆様を思いやる先生の温かいお気持ちが進められています。そのお気持ちの深さは、セピア色に移ろいゆく誌面のうえでも、過ぎゆく時をものともせず、いつまでも力強く私達を励ましてくださるに違いありません。創刊号から 60 年もの長きに亘り、本誌を通じて心を尽くした情報を発信し、本誌を育んでくださった佐々木先生の慈愛に満ちたご指導に感謝いたしまして、心からご冥福をお祈り申し上げます。

モダンメディアの巻末随筆の欄には、昭和 32 年から平成 21 年にわたり佐々木先生から随筆を計 18 編寄稿していただきました。

編集委員会で検討した結果、より多くの皆様に佐々木先生がお書きになった随筆の『面白味』を理解していただけるよう、異なる趣をもつ随筆を複数掲載することになりました。

追悼文で言及されている随筆「校正」に加え、編集事務局で選択した 3 編の計 4 編（全文）を掲載しました。何れの随筆も機知とユーモアに富む作品で、生前の佐々木先生のお人柄が偲ばれます。

なお、使われている表現と用語は、当時のもので、原文のまま掲載させていただいています。

（編集事務局）

（昭和 35 年 10 月 10 日発行モダンメディア第 6 巻、第 10 号掲載）

新 車

テキサスの、とあるバーでのことである。横に居た中年の男が、土地柄のためか話しが大きく、何でもアメリカ第一でないと気に入らぬらしく、得意になって自慢話をしたあげく、今度は根掘り葉掘り日本の事を聞きたがる。致し方なく返事をした。

〃俺の家には庭がある〃

〃俺の家ではバラを植えている〃

〃俺の家では女中さんを置いている〃

〃俺の家ではシェパードを飼っている〃

しかし実の所、女中さんと言っても知り合いの家の娘さんであり、シェパードと言っても純粹の雑種に近い代物であるが、言ったことは嘘ではない。

そこで彼氏は驚いたらしい。アメリカでこの様な生活をするのは可成り高級な部類に属することだからであらう。彼は興味深気に、それではお前は車を何台持っているか？ときた。これには私はグツと参った。私の家には自転車すら無く、車と名の付くものは三輪車と乳母車だけである。

しかし幸なことには私には女房、即ちカカーがあることを思い出した。そこで私は落ち着いて返事をした。

〃俺は日本製を二台持っている。型は少し古いが、丈夫だし油も食はない。しかし近頃は少しエンジンの掛りが悪くなり、それに時々パンクする。新車も良いだらうが、古い奴も捨て難いよ〃

彼氏は私の話しを疑はなかった。それは二台の車を持つことは、さして珍しいことではないからであらう、しかし余り素直に私の冗談が信じられてしまったので、私は多少気になって来た。

やや間を置いて私は本当の事を話し、冗談の種明しをした。この時くらい私の下手な英語が相手に完全に理解されたことはなかったようだ。彼は目を輝かせて言った。

〃ドクター、俺も新車が欲しいよ〃

（佐々木正五）

(昭和39年3月10日発行モダンメディア第10巻、第3号掲載)

百号記念

よくも続いたものである。

時には遅れ、時に佇み、そして時には止りそうになりながら、それでも動いている我が家のボンボン時計のように。

ふと見上げたこの古時計に編集会議の折の諸公の顔が浮ぶ。

いくら動いても、リズムは作れるが時間には無関係なことを気にもとめず、いつでも同じペースを守る振子氏。

派手に動き回って、分単位の時間は示せるが、自分だけでは時刻を示すことの出来ない長針氏。

じっくり落着いて時刻を指すが、やや動きの鈍い短針氏。

美しい音で家中に刻を知らせてはくれるが、時折意外な時間に鳴りだすボンボン鐘氏。

自からは動こうとはしないが、専ら他人を走らせることによつて時刻を示す文字板氏。

裏方ではあるが、自分が動かなければ……と自信満々の歯車氏。

何といつてもエネルギー源であることに間違いはないが、使い方によっては、おもちゃの自動車しか走らせることの出来ないゼンマイ氏。

君は一体その中のどれかね」と皮肉氏が聞くだろう。

「まあ、僕は時計の硝子さ。何故って、先が見えるからね」とも答えようものなら諸公異口同音に言うだろう。

馬鹿言うな！ 見えすいたことを言うな！」

こんな連中が集まって時計が動くのか？ と心配された長老が居られたとか。

確かに、よく狂う時計だが、でも明日の刻をつげるのは、この種の時計ではなかるうか。

(佐々木正五)

(昭和58年12月10日発行モダンメディア第29巻、第12号掲載)

老人車

いつしかナツメロの恋しい年齢になっている。気付かぬ素振りをしてる訳ではないが、時折いやつと言う程気付かされる。

大阪での医学会総会の折、講演も聴き疲れ展示会場に足を運んだ。可成りの人込みである。人工心臓を持つ山羊の前では、押しつ戻りつしながら、何か神秘的なものを覗き込むようにして眺めていた。後ろからまた押し来て来た。オチイサン!! 見えないよ!!

これは私が悪かった、後ろの人が見えないうらしい、少し膝を屈めながら考えた。

オチイサンではなく、オチイサンではなかったか？ しかし屈めた膝はすぐガクガクしてきた。体は正直なものである。

先日、暫く振りで電車に乗った。丁度日曜日のこと、幼稚園の遠足にぶつかり満員である。例によつて子供達は膝を立てて窓に向い何やら歌っている。可愛らしい幼児の無邪気な騒ぎに見とれていると、突然横にいた先生らしい人が子供達に呼び掛けた。

「ここは、おじいさんやおばあさんの座る席ですよ、早く代つてあげなさい」

なる程、見ればシルバースーツ。電車の中でも道徳教育とは、と思つたがその対象が自分であるのに気付くのに少し間があった。折角空けてくれた席だ。これも教育上の芝居と心得て、礼を言つて腰を降したが、前に立ち並んだ子供達は不思議な動物でも眺めるような顔つきで小生を見詰めているのには参った。

勤務先が小田急電鉄の沿線で、伊勢原という小都市にある。先生や学生、更には患者さん達のためにも、少しは空いた電車が来れば良いがと思いつつプラットホームに立っていると、目の前をロマンスカーと名付けた特急が通過してゆく。車窓には楽しそうな若いカップルや、家族連れの様が見られる。これがこの小駅にも停車してくれば大助かりであるが、会社の営業政策とは一致しないらしい。ロマンスカーとは言わず、老人車と改名しても、やはり駄目だろうか。

(東海大学医学部医学部長 佐々木正五)

〈佐々木正五先生略歴〉

- 1916年 6月 樺太大泊町に生まれる
 1941年 3月 慶應義塾大学医学部本科卒業
 1941年 5月 海軍二年現役軍医科士官として服務
 1955年 8月 モダンメディア（創刊）初代編集委員就任
 1959年 6月 北里賞受賞
 1963年 8月 慶應義塾大学教授（医学部微生物学 旧細菌学）
 1970年 12月 小島三郎記念文化賞受賞
 1972年 11月 慶應義塾賞受賞
 1974年 1月 東海大学教授（医学部微生物学）・初代医学部長
 1979年 12月 東海大学医療技術短期大学長
 1982年 1月 日本細菌学会 理事長
 1989年 1月 国際微生物学会連合 会長
 1989年 6月 国際無菌生物学会 初代会長
 1991年 7月 慶應義塾大学 名誉教授
 1992年 4月 東海大学 名誉教授
 1994年 5月 勲二等瑞宝章受章
 2014年 11月 心不全のため逝去（98歳没）

〈本誌 Web 版に公開中の佐々木正五先生の記事〉

第 50 卷 (2004) 8 号

モダンメディア 発刊 50 年記念「発刊 50 年によせて」

http://www.eiken.co.jp/modern_media/backnumber/pdf/MM0408-02.pdf

第 55 卷 (2009) 1 号

随筆「みちしるべ」

http://www.eiken.co.jp/modern_media/backnumber/2009_1.html?panel=2

第 58 卷 (2012) 3 号

Master's Lectures「私の研究史」

http://www.eiken.co.jp/modern_media/backnumber/pdf/MM1203_02.pdf